漢字のうた【師範代養成コース　二段】

1

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは　少し明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月の頃はさらなり。闇もなほ、螢の多く飛び違ひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

2

秋は、夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆるは　いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた　いふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは　いふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎ熾して、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

（清少納言『枕草子』）

3

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて的に向かふ。師のいはく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。のちの矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」と言ふ。

わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、万事にわたるべし。

（兼好法師『徒然草』）

4

祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色　盛者必衰の理をあらわす
おごれる人も久しからず　ただ春の夜の夢のごとし
たけき者も遂には滅びぬ　偏に風の前の塵に同じ

（作者未詳『平家物語』）